

01 基本【共通】のチェック① 5W1H 等

- ☐ 事業目的は何？参加者にどうなってほしいのか？(Why)
- ☐ どんなアート活動をどう実践する？(What & How)
- ☐ アーティスト／参加者は誰？(Who)
- ☐ 事業スケジュールは？短期／長期なの？(When)
- ☐ スケジュールの共有はできているか？(Share)
- ☐ 実施場所はどこか？最寄り駅・バス・徒歩は？(Where)
- ☐ 実施場所の学習環境はデザインできている？(LED)
- ☐ コーディネーター・アーティスト・現場のやり取りの方法(How)
- ☐ 事業規模・予算は？(How mach)
- ☐ 広報は誰がどうする？(PR)
- ☐ 記録・アーカイブはどうか？(Documentation,Archive)
- ☐ 評価はどうか？成果を求められるのか？(Evaluation)

03 コーディネーターのチェック

- 基本事項に関するチェック
 - ☐ スケジュール管理(MTの設定・調整を含む)
 - ☐ 事業の企画段階から評価の指標を入れ、報告書に反映する
(基本チェック②プログラム評価の)仕組はできているか
 - ☐ プログラムの事業途中での問題解決や事業改善の方法を理解している
- 事業関係者(アーティスト・参加者)に関する事項
 - ☐ 参加者の状態を把握する。年齢層, WSの経験度, 障がいの有無, など
 - ☐ アーティストの状態(アートの種類と特徴, 経験値)の把握
- 学習環境等のデザインに関する事項
 - ☐ 実施会場の広さ, 使用可能備品, 温度管理調節, 電源の位置, 音響の有無, 音を出して良いか, など
 - ☐ 緊急時の連絡先・者や事後の報告などの対応について

04 アーティストのチェック

- ☐ 最終アウトカム(文化芸術による社会包摂の理念)の共有
- ☐ 福祉施設(高齢者・障がい者等)や学校等の規則や規律を理解する
- ☐ 連絡方法の共有。窓口はどこ・だれ？
- ☐ 参加者の状態(年齢, 男女, 障害の有無等)を把握する
- ☐ 求められるワークショップ等のコンセプトと自分のワークはマッチしている。参加者は主体的に学べるか？
- ☐ 事業の準備・実施・まとめて起こる問題への対処方法もしくは役割分担の把握(会場の学習環境デザイン: 機器・道具・補助人員の有無, 物品購入, 謝金・交通費などの予算, など)

02 基本【共通】のチェック② プログラム評価(ロジックモデル作成等)

- 最終／戦略アウトカム(事業理念・目的)に関する事項
 - ☐ 文化芸術活動が対象者、施設、地域にとって意味あるものである。特に事業目的と現場の求める目的の違いを確認
 - ☐ 共生社会構築のために、多様性を理解し、違いを活かす
- 「文化芸術による社会包摂」の理念を共有している
- 直接アウトカム・活動(事業内容・計画)に関する事項
 - ☐ 最終アウトカムを実現するために、誰に何をどう提供するのか, もれなく洗い出しができています
 - ☐ 文化芸術(アート)・医療福祉などが独自性を保ちながら, 事業内容・計画がつくられている
 - ☐ 現場が納得できる評価の指標と判断基準ができている負担にならず, 継続できる評価の仕組になっている
 - ☐ 実施途中でもプログラムの改善ができる

- 個人情報の管理や記録に関する事項
 - ☐ 写真撮影・記録映像の可否。写真は可だが, ビデオは不可など, 具体的なチェックを!
 - ☐ 報告書やWEB投稿の可否。顔を出す／出さない。出す場合にはばかしは必要か? Facebook, ツイッター, Instagramなど, どのSNSはOKか?
- 予算・会計と広報等に関する事項
 - ☐ 会計報告の処理がしやすいように, 備品・消耗品・旅費・謝金などに分けて, 予算計画を立て, 実行する
 - ☐ ポスター・ちらしはつくるのか? 設置・配布場所の選定HPやSNSでの広報計画
 - ☐ 事前募集(定員有無)及び支払方法の決定(事前払い?)
 - ☐ 当日の開催(中止等)に関する決定判断と参加者への周知

●コーディネーターが中心になって事業全体を進行することを利害関係者間で最初に合意することが重要!

05 現場職員などのチェック

- ☐ 最終アウトカム(文化芸術による社会包摂の理念)の共有
- ☐ アーティストの特徴を把握する
- ☐ アーティスト・コーディネーターとスケジュールや役割分担を決める
- ☐ 会場の学習環境デザイン(面積, 照度, 音響設備, 道具・材料の準備, 職員の補助の必要性, 参加者の導線・配置等)
- ☐ 担当職員チーム及びリーダーの決定

●このチェックリストはガイドラインのすべてを網羅したものではなく, コーディネーターの中心とした実践者のためのプログラム評価を実践の中心に据えて, 重要になるポイントを示した。

01 【序】アートは共生社会構築の基礎になる！

「社会包摂」とは違いを尊重し柔軟で多様性に富む社会をつくること, マイノリティをマジョリティが吸収することではありません。
「文化芸術による社会包摂」とは正解・不正解ではないアートの在り方にヒントがあります。アートはモノ的とコト的な側面の両方の性質をもち, 創造的な「出来事」づくりです。そこで, どんな学びが起こったかが大事。アートとはモノとコトの総合=生きることの身体技法。アートは世界の見方を広げ, 自分をアンラーニングさせる力を持っています。最近アートが経済発展の道具になるというアイデアがあります。でも, アートとは「社会になんの役にも立たないことにおいてのみ社会に役立つ。アートの逆説的なふるまい。自分の生きる社会に違和感を感じさせるのもまた, アートの力」(『素手のふるまい』という鷺田清一さんのことばもあります。
「現代はアートの時代」(R.シュタイナー)です。アートだけが人間を自立させる, “自由”と“愛”の力で課題に立ち向かう力を持っています。この簡単ガイドは, アーティストが福祉施設等に行ってワークショップをする時の具体的な方法を考え, 参加型ですプログラム評価をご紹介します。本ガイドラインが広く活用されることを願っています。

*この「簡単ガイド」は, 文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業「文化芸術による社会包摂の評価手法・ガイドラインの構築」(2017.12-2020.3)の成果を見やすくまとめたものです。

03 文化芸術による社会包摂ガイドラインとプログラム評価 *** とは？

- 文化芸術基本法に社会包摂の理念(第2条)を共有し, 実践の場に普及させる具体的な方法論の構築は緊要な課題!
- 必要な「文化芸術によるガイドライン」を考えるために, 事業=プログラム評価について考え, 実践的提案をしたい!

***プログラムの実施中に何が起きているかを見るための評価

04 文化芸術による社会包摂ガイドライン検討の経過(過去2年間)

【2017年度】高齢者施設「えいめい」のアウトリーチ活動の社会インパクト評価

●概要: アーツ前橋の「表現の森 協働としてのアート」(2016.7.22~9.25)事業(石坂玄士: 神楽太鼓・山賀さくろ: ダンサー)から始まるアウトリーチについて関係者からの聞き取りに基づいた社会的価値を抽出するための社会インパクト評価を実施

- 結論
 - ・福祉と文化芸術は異なる言語を用いるため協働するにはさまざまな問題が存在するが, 共生社会構築という共通目標に向けて, まずお互いの違いをありのままに受けとめる必要性
 - ・福祉側の最終アウトカムは「文化的な生活の中でより良い死を迎える(Quality of Death)」。
 - ・高齢者が豊かな文化生活を送ることができるよう, アートを体験したり, 職員のケアにもなる。
 - ・アート側の最終アウトカムは「質の高い企画を生み出し, 芸術が社会とつながる」。
- ・アーティストには新しい表現の発見・創造の場, 企画の運営にとっては, アート(美術)による地域貢献であり, 広義には芸術の社会的価値の創出

02 【研究目的】わかり合えない社会の中で共存するための文化芸術による社会包摂とは？

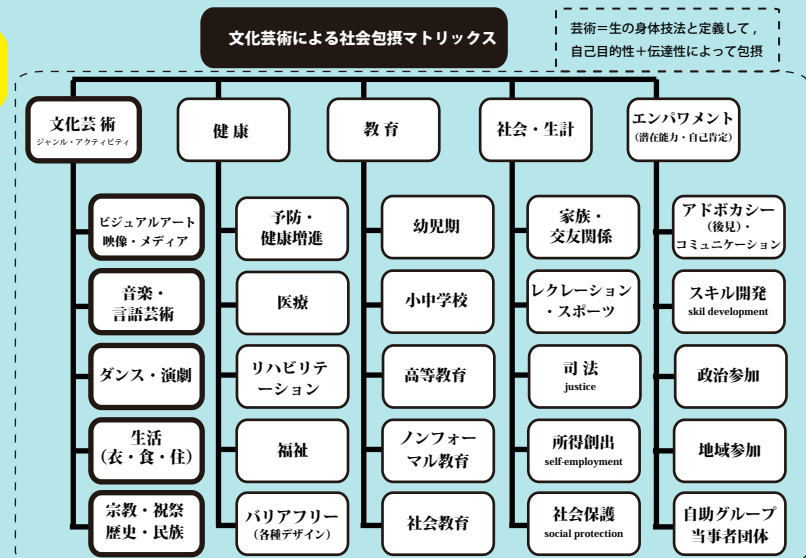
- 目的 「障害者, 高齢者, 子どもや子育て中の女性, 経済的弱者やセクシャルマイノリティなど, 社会的に困難を抱える人を含むすべての人びとが, 文化芸術活動によって, それぞれの多様性を認め, 他者理解とコミュニケーションの回路を拓き, エンパワメントされ, (社会的)関係性を再構築し, 個人や家族, 地域の人々の生活の質を向上させ, 持続可能な共生社会をつくる」
- この目的のために, 一人ひとりが自分の能力を最大限に発揮し, 地域の中で幸せに暮らす共生社会の構築には多様性の受容が必要。アートは共生社会構築の基礎になるべきでは!
- 「文化芸術による社会包摂」とは, アートがもつ多様な解=(正解ではなく)納得解を個々人がもてるように, ①社会包摂というビジョンを共有し, ②対話の場をもち, ③活動の質を高め, 「マイノリティの人がエンパワメントとされ, マジョリティの人の意識が変わること」**

**『はじめての“社会包摂x文化芸術”ハンドブック』九州大学大学院芸術工学研究院ソーシャルアートラボ発行, 2019年を参照。

【2018年度】地域包括ケアシステム構築・地域に根ざすリハビリテーション(CBR)から考えるガイドライン

- 概要: 「地域包括ケアシステム」(厚労省2016)と WHOの「CBRガイドライン(地域に根ざしたリハビリテーション)1994」を参照し, 文化芸術版の①「文化芸術による地域包括ケアシステム(案)」と②「文化芸術によるCBRマトリックス(案)」をつくり同ガイドラインとは何かを考える。
- 結論
 - ・①は, 医療, 福祉・介護, 地域がアートによるコラボレーションを進め, それぞれの質を見直し, 再構築し, 人間中心のコミュニティに変更すべきという提案。コーディネーター機能が重要
 - ・②では, 医療的リハビリを超えて, 文化芸術が1つの柱になって障がい者等がエンパワメントされるような評価指標をつくる。

*地域包括ケアシステムとは, 自分の住んでいるところから30分圏域で必要なサービス(介護・医療・生活支援など)が提供されるシステム



*CBRとは地域におけるリハビリテーション、機会の均等、地域づくりのための戦略。CBRが目指すことは, CBID (Community-based Inclusive Development)。CBRマトリックスは共生社会構築実現のガイドライン。①様々な困難を抱える人や集団の置かれた状況を包括的に見るためのツール, ②リハビリや医療福祉面だけではなく, 教育や生計などの視点を含んでいる, ③個人の充足感や満足度を見ること, 事業、団体の活動診断、地域を診断するものとして使える。マトリックスの使用方法は, ①~③までの充足度をみるためのチェックリストなので, 個人でも組織や地域の単位でも支援のための診断ができる。

01 はじめに

○共生社会構築に文化・芸術（アート）は何ができるのか？
美術教育研究／実践者として抱えてきたのは「アートは人や社会の役にたっているか」という疑問でした。

○「社会包摂×アートガイドライン」作成から評価の必要性がみえ、評価によって福祉とアートの共通言語を探り、つなぐという可能性が明らかになりました。

○キーワードは参加(ワークショップ)型評価！
評価とは、「共に価値を創出する創造的活動」、「社会の改善活動」(Scriven)であり、利害関係者(ステークホルダー)が全員でプロジェクトのはじめから評価の視点を持ち、達成したい「最終アウトカム(成果)」の理念の合意形成をし、各論(中間アウトカム、活動)に落とし込むことが重要です。異なる経験・資源をもつ人たちが同じ目的に向かい何ができるかを考える機会をつくりだす。つまり参加(ワークショップ)型評価は正解ではなく、各々の納得解を統合できるのです！コーディネータ・アーティスト・施設職員等は協働者・共犯者として全員でプロジェクトの責任体制をつくることができ、評価を軸に据えることによって社会の改善運動になるはずです。



02 プログラム評価と参加型評価

○「評価とは、社会の改善活動である」(Scriven)
・評価とは査定やランクづけをすることではない。“evaluation”とは、ex-(引き出すこと)とvalue(価値)で、価値の発見

○「評価は、物事の本質、値打ち、意義を体系的に明らかにすること」(Scriven)
○プログラム評価とは、評価対象となる取組み(プログラムや政策など)の実施状況・結果を特定の基準と比較・明示し、価値判断を行うこと。その評価が取組み、あるいは社会の改善に資すること

○プログラム評価の「評価5階層」(Rossi et al. 2004)

- ①ニーズ評価: 評価対象となる取組みはどんな人のどんなニーズに基づいているかを評価
- ②セオリー評価: 評価対象となる取組みは意図した成果・効果の達成に向けて妥当な仕立て(ロジックモデル等)になっているかを評価
- ③プロセス評価: 例えば、評価対象となる取組みは当初意図した通りに(②セオリー評価で仕立てたロジックモデルの通りに)実施されているかを評価
- ④アウトカム評価: 評価対象となる取組みは意図した成果・効果(②セオリー評価で仕立てたロジックモデルの成果・効果)を達成できているかを評価
- ⑤効率性評価: 評価対象となる取組みに投入された資源(資金・人材・労力など)は適切なものであったかを評価

31 アートの時間のロジックモデルづくりワークショップのプロセス

① プログラム評価とは何かについて説明する

・最初に、評価とは、プログラム評価とは何かについて概要を説明する。“評価”＝“事実特定”＋“価値判断”＝“改善活動”

② 評価(ロジックモデルづくり)ワークショップのルールについて理解する

- ・自分の考えをカード(付箋)に書く
- ・1枚のカード(付箋)には1つのアイデアを書く
- ・具体的な内容を書く
- ・簡潔な文章で書く
- ・事実を書き、抽象論や一般論は避ける
- ・議論の前にまずカードを書く
- ・カードをボードから取り除くときは、コンセンサスを得る
- ・誰が書いたカードかは問わない

※参加者(実践現場の方々)が納得できる指標と判断基準を設定(負担になり過ぎず)無理なく続できる評価の仕組みを検討

③ 最終アウトカム(プログラムのゴール)を考える

・まず、「アートの時間」において「最終的に目指される目的は何か。誰のどんな変化が目的なのか」について検討した(右頁図、以下同)。「利用者が自分の意思で自由に仕事ができる」「作品がさまざまなところで利用される…、それは利用者の工賃アップかな…」。「同じものがあって言ってください」。「自分で自由に仕事ができる(それによって社会に参加しているんだ)」「これが最終ゴールでいいですか?」「ちょっと抽象的な…」



最終的に、「利用者が自分を肯定したり満足したりする」となった。この上位目標の合意形成が最も大事！



④ 中間・直接アウトカム(作戦目的)を考える

・次に、「最終的に目指される目的を達成するために、どのような成果の達成が必要か」について検討を行った。

・重要なのは、最終アウトカムの実現に貢献しうるアウトカムを網羅のダブリなく洗い出すことがポイント！

・中間アウトカムの「利用者がアート活動を通して社会に参加している実感をもつ」への直接アウトカムとして「02: 利用者が自分の意思で自由に仕事ができるようになる」や「03: 利用者の工賃が上がる」があげられ、「利用者さんのなかには、気持ちや行動が落ち着かず、なかなか仕事に取組むことができないでいる人たちもいる。このような人たちのなかにも、絵を描くということでは集中して取組み、そのために事業所(麦わら屋)に来てくれる人もいます。」という意見が出された。

・アート活動をなかなか仕事として理解できなかった家族がいたが、「麦わら屋の〈アートの時間〉に参加し、絵を描き、それが展示されたりすることで、この利用者さんへの印象(見方)が変わることもある」という意見もだされた。

⑤ 活動(具体的な事業内容)を考える

・初期アウトカムを実現するために「誰に」「どんなサービス」を「どう提供するか」、を考える

・具体的な活動を考え、予算をしっかりと洗い出す

・自団体の事業だけでは達成できないアウトカムがあるときには行政や企業を含む、他組織との連携を検討

・この段階まで来たら、上位目標との整合性を検討する。現在実施している事業とのギャップがある場合には事業内容の修正も検討

・「縦のロジック」と「横のロジック」をチェック

・ロジックモデルはあくまで仮説。事業を実施しながら必要に応じて改善してゆくもの ***

***日本財団『ロジックモデル作成ガイド』https://www.nippon-foundation.or.jp/app/up-loads/2019/01/gra_pro_soc_01.pdf (2020.3.10)

⑥ 指標作成のためのワークショップ

・参加者(実践現場の方々)が納得できる指標と判断基準を設定

・(負担になり過ぎず)継続できる評価の仕組みを検討

・ロジックモデルに位置づけられたアカウントそれぞれに指標設定

・一般的な方法は指標を根拠となるデータを調査方法を決めデータの収集・分析を行うが、麦わら屋の場合は社会調査などは行わず、利害関係者の認識に基づく判断・評価で実施することとした。

・たとえば、「家族や地域の人たちと利用者のつながりが強まる」に対しては、指標「夏祭りに200人がくる」、入手手段「祭りの入場者をカウントして確認する」と、利害関係者が困難なくできる計画を立てることが重要である。



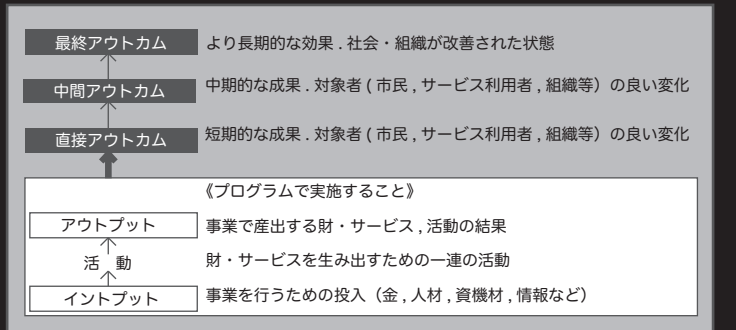
指標の例(一部抜粋)		
アウトカム	指標(判断基準)	入手手段
(最終アウトカム) 利用者が自分を肯定したり満足したりする	利用者が自分の作品を何度も確認してから誇らしそうにする様子がみられる	家族と職員から意見をとりまとめ(聞き)、その都度検討する(記録しておく)
(中間アウトカム) 利用者がアート活動を通して社会に参加している実感を持つ	展示会にて、利用者が自分の絵を見る様子(表情など)がみられる	展示会ごとに利用者の様子を写真に撮り、変化を確認する
利用者がアート活動で有名になる	月に1度は(事業所に)見学者が訪れる	見学者リストを作成し、月末に状況を確認する
利用者が作った作品の市場がみつかる	①(商品開発などをする)業者 に1人でも協力者ができる ②前橋市内に障害者芸術のギャラリー(展示・販売をする場所)が1つでもできる	月末の会議で状況を確認する



ロジックモデルとは？

○ロジックモデルとは、あるプログラムについて「利用可能な資源(インプット)」や「計画している活動」、「活動の直接的な結果(アウトプット)」、「活動を行うことで達成が目指される成果(アウトカム)」の関わりを体系的に図式化したもの。

ロジックモデルは福祉や教育などの人間を対象とした不確実な変化にリニアな因果律を当てはめられるのかという反論に対して、多様性をきれいにまとめることを目的としていないので、効果的で戦略的な介入のツールであることを理解することが大事！ **



*NPO法人麦わら屋:就労移行支援事業、就労継続支援B型事業、相談支援やグループホームなどの福祉障がいサービスを実施。利用対象者は身体・知的・精神的障がいをお持ちの方。活動内容は、内職作業、豚肉の加工、めだかの養殖など。2018年12月頃より「アートの時間」を開始した。(2015年5月開設)
**図を含めて、源由里子「参加型評価」見洋書房、2016、pp.38-39を参照。



イラスト提供:麦わら屋アート班

新藤健太作,2019